

巻頭言

こんな女性に巡り会いたい

会長 山崎 學



令和2年はコロナに明けて、コロナで終わろうとしている。習近平が封じ込めに失敗したおかげで世界中大騒ぎになっているのに、中国批判は出てこない。トランプは大統領選で負けるし、今年は *annus horribilis* になってしまった。

何か面白い話はないかと探していたら、出久根達郎氏が本年10月10日付日本経済新聞に寄稿した『「化け込み」の女性記者』という中平文子の生涯について書かれた記事に出会った。新聞記者の身分を隠して口入れ屋を騙し住み込み女中で化け込み、2、3日働いて正体露見せぬうちに退散する。『婦人記者化け込みお目見えまわり』（1916〔大正5〕年1月1日、須原啓興社刊）では女奇術師宅、モデル周旋所、芸者置屋、尼寺、吉原遊郭などのルポ記事が満載され、3ヵ月で35刷と版を重ねるヒットとなった。

中央新聞記者「なでしこ」、本名中平文子は1888（明治21）年愛媛県松山生まれ。京都府立第一高女卒業後に女優となった。その後結婚するが間もなく離婚し、大正2年中央新聞に入社。当時25歳で婦人記者の先駆となるが、程なく代議士でもあった社主の愛人となって政界の裏側を記事にして指弾される。出家するつもりで京の某寺に駆け込んだが、そこで禅を学ぶ若者と意気投合し、寺を出て所帯を持つ。しかし、その後8歳上の作家武林無想庵と知り合い結婚し、フランスに渡る。

フランスで文子は娘を出産。2年後に帰国し、無想庵は文子を題材にしておのれの不品行、だらしさを小説にして発表する。1923（大正12）年二人は娘を連れて再びフランスへ。文子は日本料理店を開き生活を支えたが、経営は順調とは言えず留学生の愛人になる。無想庵はこの辺のいきさつを『Cocuのなげき』の中で寝取られ亭主の悲哀として書き、文子も『この女をみよ』の中で自叙伝風に書いている。

やがて愛人の留学生に嫌気が差し、文子は無想庵の信奉者であった別の留学生の手引きにより南フランスのニースに逃げて、その留学生と結ばれる。逃げられた愛人はニースまで文子を追いかけてきて、情にほだされた文子は関係を復活してしまう。しかし、モンテカルロのホテルで些細なことで愛人と口論になり、文子は頬をピストルで撃たれるが、弾丸は口の中で止まり、奇跡的に助かる。その後、1935（昭和10）年に文子は無想庵と離婚。ベルギー在住の貿易商と結婚した。波乱の人生を送った文子は、1966（昭和41）年77歳でその生涯を閉じている。

近年、将来の少子高齢化に向けた労働市場の生き残り策として、高齢者の再雇用、女性の社会進出を政策的に推し進めている。女性の出産・育児といった社会生活上のハンディキャップについて家庭・社会全体が支えていくことには賛成である。しかし、最近多くの現場で起こっている、女性の占める割合が少ないから特別枠をつくるといった風潮（日本精神神経学会しかり）には抵抗があり、自立している女性に対してむしろ偏見に近い気がしている。

昔の女性は強かった